

2019年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」
事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【宮城県】

学校名【登米市立南方中学校】

1 実践テーマ	I ・ II ・ (III) ・ IV ・ (V) (複数選択可)
2 実施対象者 (学年・人数)	登米市立南方中学校 全校生徒（219名）、教職員（31名）、保護者等（40名） 第1学年 71名 第2学年 64名 第3学年 84名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（ ） ② 行事名（『パラ陸上選手による講話』、『盲導犬講話』） ③ その他（ ） (2) 地域における活動 ① イベント名（ ） ② その他（ ）
4 目標 (ねらい)	テーマ 「インクルーシブな社会の構築に向けて ～個性の尊重～」 目的 スポーツを介して障害者と接したり、障害者スポーツに関する講演や体験したりすることにより、「障害者＝特別な人」ではなく、自分と同じ「当たり前存在」として受け止めることができるようにすることを図る。また、ハンディをもつことで気づく、自分の得意なことや苦手なこと、強みや弱みなど、そうした一人一人の違いや多様性を認識したうえで、自分に何ができるかを考えられるようにする。
5 取組内容	1 『パラ陸上選手による講話』 ゼンリンデータコム所属 パラ陸上選手 又吉 康十 氏 オキノスポーツ義肢装具 代表 沖野 敦郎 氏 11月22日（金）、5・6時間目に又吉さん、沖野さんの両講師を迎えて実施した。 又吉さんは、沖縄出身でゼンリンデータコム所属のパラ陸上選手（25歳）。大学生3年生の時、電車と接触事故に遭い左膝下を切断。しかし、沖野さんと出会い、2017年よりスポーツ義足を使い走り始め、はじめは歩くのも大変だったが、大会に参加するよう

になり向上心が芽生えた。練習が月1回から次第に増え、大会で記録を伸ばすようになり、現在は走幅跳6m33cmの日本記録保持者となった。そして「今は不自由ではあるが、不幸ではない。足を切断する前より、生活が充実している」と話し、さらに「物事の捉え方次第ですが、障害者のことだけを考えてはいけない、お年寄りや妊婦さんなど僕より大変な人はいっぱいいる」とそうした方々にも十分配慮してほしいと話した。



一方、沖野さんは東京でオキノ義肢装具を経営。又吉さんの義足のサポートを続けている。義足の種類や用途等の話をさせていただいた後、代表の生徒が、義足の体験を行った。又吉さんと同じスポーツ義足を装着し、歩き方を教わった。沖野さんは、「スポーツ義足の難しさを体感することで、選手の凄さや、障害をもっている健康者と変わりなく暮らしていけること等を、身をもって実感してもらうことが大切」と話した。さらに、「鉄道車両やバスなどに設置されている、高齢者・障害者・体調不良者・妊婦・乳幼児連れ（ベビーカー含む）などの方への優先席を開けておいてほしい」とも話した。



2 『盲導犬講話』

12月6日（金）、日本盲導犬協会 仙台訓練センターの方とユーザー（盲導犬を利用している人）のお二人に、ご講演いただいた。

まず仙台訓練センターの方から、盲導犬を見かけたとき「やってはいけないこと」について4つの「お願い」があった。1つ「声を掛けない」、2つ「さわらない」、3つ「顔をのぞきこまない」、4つ「おもちゃ、お菓子をあげない」こと。理由は、ユーザーと一緒に歩いているときの盲導犬は「お仕事中」なので、仕事に集中できなくなるようなこと、遊びたくなるようなことはしないでほしいということだった。



その後、仙台訓練センターの方とユーザーさんに実際に盲導犬を連れて、障害物を避けながら歩く実演をしていただいた。盲導犬は慎重にユーザーに危険がないように歩行していた。盲導犬の仕事は、①角を教える、②段差を教える、③障害物を教えること。「ユーザーさんは、目が見えなくても、みんなと一緒にです。バスにも乗ります、買い物にも行きます、春には登米市の桜を盲導犬と一緒に見に来ました。常に一緒に、二人で一人です。」そして目の不自由な方への具体的な支援の例として以下のような話を伺った。「信号を待っている時は盲導犬には信号を判断することはできません。目の不自由な人は、車の音や周りの様子などから安全を確認し、横断してもよいか

	<p>を判断しています。そうした時には、皆さんから声を掛けていただくと大変助かる。『赤ですよ』『青になりましたよ』『盲導犬をお連れの方、何かお手伝いしましょうか』等……。その一言があると、大きな安心につながる。」障害のあるなしではなく、全ての人にやさしい社会になるような思いやり、心配りができる、思考力・行動力が大切なのだと改めて考えさせられた。</p>
<p>6 主な成果</p>	<p>生徒の感想</p> <p>○この講話を聴いて、パラリンピックや義足を付けている人などに、興味をもつことができた。又吉さんは立つのでさえ難しそうだった義足で100mを12秒台、走幅跳で6m以上跳ぶのはすごいことだと思った。</p> <p>また、沖野さんは日本で数千人しかいない義肢装具士で、いろいろな義足があるということを知った。</p> <p>○僕は、障害者の人は「いつも暗い気持ちで生活しているのかな」と思っていたが、又吉さんはすごく明るく講話していたので、聴いている僕たちも楽しかった。</p> <p>○私は「二人で一人」という言葉が印象に残った。一人や一匹でできることは多くなかったとしても、二人が合わさることで、心が一つになったり、目が見える私たちと変わらない生活を送ることができることが分かった。私は今まで目が見えない人って大変そうだなと思いつつも、どこか他人事のように考えていたことが多かったが、盲導犬と一緒にいることの大切さ、心強さが良く分かった。</p> <p>※多くの生徒たちの感想には、驚きと感動の言葉が寄せられ、応援メッセージには、又吉さんへの記録への挑戦とすばらしい義足を作ってほしいという言葉がいっぱいあり、障害者やその人をサポートする人への理解、尊敬の気持ちがつづられており、障害者を当たり前存在として受け止めることができた。</p>
<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>○「パラ陸上選手による講話」では、お話だけでなく、実際に見て、触れて体験をさせてもらう事により、実感がわき、強く心に残る講話になると考えお願いした。</p> <p>○実際に、生徒の代表に義肢装具の体験をさせていただけた。</p> <p>○少しでも多くの保護者にも知っていただくために、PTA行事と協働での開催にしたところ、多くの人に参加していただいた。</p>



8 主な課題等	<p>○一過性のものにならないように、2020 年も継続した取り組みが必要である。</p> <p>○行事のみではなく、普段の教科の授業や特別活動、道徳、保健体育、地域との連携を含めた活動としてのカリキュラム・マネジメントができるとうよかった。</p> <p>○市内でのオリンピック関係の交流等が少ないと、なかなか生徒・保護者・地域でも盛り上がらないところがあるので、ホストタウン事業として、どんな協力ができるのか模索していきたい。</p>
9 来年度以降の実施予定	<p>○東京オリンピック・パラリンピックに向けてのスケジュール表を校内に掲示、啓発を図る。</p> <p>○聖火リレーの意義、そのルート、ランナーについて等オリンピック・パラリンピックの歴史を学ばせる。</p> <p>○活躍が期待される、県出身の選手等の紹介やそれに携わる関係者（義肢装具士等）の紹介、外国人選手の紹介を行い、校内掲示等で紹介する。上記について、できるだけ生徒会専門委員会等の活動をするなど生徒主体で行う。</p>